

異世界で Ω のカントに
覚醒した元サラリーマンが最強の α 騎士団長
に初めての発情期を嗅ぎ
当てられて「番の刻
印、拒否権はない」と
城壁の内側で逃げ場を
失う話

「ひ……っ♡」

身体が跳ねた。自分の声なのか他人の声なのか、もう分からない。背中に押し当てられた鎧板のような胸板が、びくりと震えた僕ごと揺すった。

「動くな。まだ入り口だ」

ゼルクの低い声が、鎖骨のすぐ後ろで響く。

僕は——藤宮透は、異世界の騎士団長の膝の上に座らされていた。

下半身は剥かれている。寝巻きの裾が腰まで捲り上げられ、太腿の内側が冷たい夜気に晒されていた。だがその冷たさを感じる余裕は、もうない。

ゼルクの右手が——革手袋を外した素手が、僕の股間に触れている。

（やめ……っ♡　そこ、三ヶ月間一度も触ってない場所なのに——♡♡）

「力が入りすぎだ。息を吐け」

「は、吐いて……っ、って……ぁ♡　お……♡♡」

言われた通りに息を吐いた瞬間、ゼルクの中指が割れ目を左右に分けた。

ぬる、と指先が滑る。濡れている。自分の身体が出した液で。

「……もう、こんなに」

「ちが……っ、違う、僕が望んでこうなったわけじゃ……っ♡」

「分かっている。お前の身体が勝手に反応しているだけだ」

恥じるなどと言われて恥じずにいられるなら、こんなに齒を食いしばっていない。

ゼルクの指が上にずれる。恥丘の少し上——小さく硬い突起に、触れた。

「ッ——♡♡♡」

視界が弾ける。全身の毛穴が開く感覚。足の先から頭のとっぺんまで、知らない電流が駆け抜けた。

「ここか。反応が違う」

「だ、だめっ♡♡　そこ……っ、そこ触られると、おかしくなっ……あぁっ♡♡」

「おかしくはならない。気持ちいいだけだ。自分の身体を正確に把握しろ」

——教えてる。この人、教えてるつもりだ。

訓練場で新兵に剣の振り方を教えるのと同じ口調で、僕のクリトリスを弄っている。

ゼルクの親指がそこを押し潰すように圧をかけ、人差し指で包皮ごと小さく転がす。くり、くり、と。正確で、容赦がなくて、信じられないくらい気持ちいい。

「んっ♡ んんっ♡♡ あ、ああ……♡♡ や、やめ——♡♡」

「やめてどうする。お前は三ヶ月間、この身体から逃げ続けた。今夜、全部知れ」

ゼルクの左腕が腰を固定する力が強まる。逃げ場がない。腕一本で完全に拘束されている。三十二年間サラリーマンをやってきた僕の身体なんて、帝国最強の騎士団長には赤子も同然だった。

くちゅ、くちゅ、と水音が響く。蝋燭の灯りだけの部屋に、僕の身体が出す卑猥な音だけが満ちていく。

「……すごい量だ。指が滑る」

「聞きたくなっ……あ♡♡ 言わないで……っ♡♡」

「なぜだ。お前の身体が正常に機能している証拠だ」

「正常じゃない……っ♡♡ だって僕は、男なのに……っ♡」

声が震える。涙が滲む。

男なのに。三十二年間男として生きてきたのに。女の身体の反応を、こんなふうに晒されている。

ゼルクの指が止まった。

「お前が男であることと、この身体が気持ちよく反応することは、矛盾しない」

低い声だった。怒りでも同情でもない。事実を述べるだけの、騎士団長の声。

「ここがどう反応するか——お前自身が知っていなければ、お前自身を守れない」

そしてまた、指が動き出す。

ぬちゅ……っ♡♡

割れ目の全体を、上から下へ。ゆっくりと。愛液を塗り広げるように。指の腹が肉襞を一枚ずつ確かめている。入り口の縁に触れた瞬間、きゅん、と奥が収縮した。

「ここだな。入り口が反応した」

「い……っ♡♡ あ……っ♡♡♡」

（怖い。怖い怖い怖い——でも、気持ちいい♡♡ 三十二年間知らなかった場所が、こんなに♡♡♡）

ゼルクの中指が、入り口をそっと押す。中には入れない。ただ縁を撫でるだけ。くぷ、くぷ、と穴が指を吸い込もうとする音がする。

「身体の方は、もう中に入れたがっている」

「言わないで……っ♡♡♡ それ、僕の意味じゃ……♡」

「ああ。お前の意思ではない。身体の反応だ。——だからこそ知っておけ」

ゼルクの親指がクリトリスを擦る。中指が入り口を押す。二点を同時に、正確に。

「あ——っ♡♡♡♡」

全身がびくんと弾けた。足先がぴんと伸びて、腰が跳ね上がって、ゼルクの腕に押し留められて――

(いった……っ♡♡♡ 外、触られただけで、イっちゃった……♡♡♡)

声にならない叫びが漏れる。初めてのアクメ。三十二年間の人生で初めて。男として。カントを持つ身体で。

ゼルクの膝の上でがくがく震える僕を、ゼルクは黙って抱えていた。左腕で腰を支え、右手は股間に添えたまま、ただ痙攣が収まるのを待っている。

呼吸が戻ってきたとき、僕は自分が泣いていることに気づいた。

「……三ヶ月間、一度も。本当に一度もか」

「さわっ……た、ことも、ない……っ」

ゼルクの喉仏が動く。嚥下する音。背後の胸板が、一瞬だけ大きく膨らんだ。――深呼吸。何かを堪えている。

「……六時間前のことを、聞いてもいいか」

ゼルクの声が微かに掠れていた。



――六時間前。

僕が異世界に飛ばされてきて、三ヶ月が過ぎていた。

砦の名はグラオヴァル。帝国の北辺、三重の城壁に囲まれた軍事要塞都市。魔獣の巢食う荒野との境界線。夜になれば全門が閉ざされ、城壁の外には一步も出られない。

僕はその砦の雑用係だった。食堂で芋の皮を剥き、馬房で藁を替え、錆びた剣を研ぐ。前の世界で営業三課の透明な歯車だった僕は、この世界でも最底辺だった。

でも——不思議と辛くはなかった。

前の世界には帰りたい場所がなかった。ワンルームの冷蔵庫に缶ビールが二本。それが僕の「家庭」のすべてだ。ここには少なくとも毎日の飯がある。屋根がある。

ただ一つだけ、耐えがたいことがあった。

股の間の——あれ。

転移した瞬間に気づいた。男性器の下に、裂け目がある。触ると柔らかい肉がある。

それ以上は確認していない。怖くて。見る勇気もなかった。風呂は深夜に一人で入り、目を逸らした。

「……藤宮、飯だぞ」

食堂で皿を並べていると、若い騎士見習いが声をかけてきた。砦の人間は僕に親切とは言えないが、露骨に虐めてくるわけでもない。前の世界のほうが——課長のパワハラのほうが、よほど堪えた。

昼食を終えて食器を洗い終わると、訓練場の方角から剣戟の音が聞こえた。

ゼルク・ヴァイゼン。

グラオヴァル砦の守備騎士団長。帝国最強と呼ばれる剣士。身長は僕より頭二つ分高い。褐色の肌に銀灰の短髪。左頬から顎にかけて走る古い刀傷。鍛え上げられた巨躯。

砦の全員が彼を畏怖していた。僕も——怖い。

でも、訓練場で新兵を指導する姿だけは、遠くから見ていた。

「足が死んでいる。膝を落とせ。親指で地面を掴め」

怒鳴らない。殴らない。身体の理屈を言語化して、一人ひとりに合わせて教える。前の世界の課長は「気合だ」「見て覚えろ」しか言わなかった。ゼルクは違った。

この人になら——と思ったことは、ない。まだ会話すらしたことがなかった。

最底辺の雑用係と最高指揮官に、接点はない。

だが——その夜。

僕の身体が、すべてを変えた。



深夜の地下浴場。

いつものように誰もいない時間を見計らって湯に浸かった。蝋燭が二本だけ灯る薄暗い浴場。石造りの湯船に湯気が漂う。

下を見ない。見ない。いつもそうだ。

——でも今夜は、何かが違った。

下腹部が熱い。じわ、じわ、と内側から焼けるような感覚が、ここ数日で急に強くなっていた。我慢できないほどではなかった——昨日までは。

今夜は違う。湯に浸かった瞬間、熱が爆発した。

「っ……♡」

身体が内側から溶ける。呼吸が乱れる。手で腹を押さえても何も変わらない。熱源は——もっと下。太腿の間。あの場所。

じわ……っ♡ と、股の間が濡れた。湯のせいじゃない。

(何……っ♡ 何が起きてるっ……♡♡)

怖い。自分の身体が制御できない。こんなこと、初めてだ。
——そのとき、浴場の扉が開いた。

ゼルクだった。

深夜の巡回後だろう。汗を流しに来たらしい。僕と目が合う。

「すっ、すみません……っ。もう出ます——」

必死で身体を沈める。裸を見られるわけにいかない。腰まで湯に浸かったまま、壁際ににじり寄る。

だがゼルクは僕を見ていなかった。

鼻を——嗅いでいた。

「……何だ、この匂いは」

ゼルクの声が低い。聞いたことのない声だった。訓練場の冷徹さとも、指揮官の威厳とも違う。腹の底から搾り出すような、粘度のある声。

「に、匂い……？」

「お前から出ている」

ゼルクが近づいてくる。湯に入るのではなく、縁に膝をつき、身を屈める。顔が近い。鼻先が——僕の首筋に迫る。

「この……甘い——」

甘い。僕の身体から甘い匂いがしている？

逃げようとした。足が滑った。ゼルクの手が僕の肩を掴む。引き上げる。湯から上半身が出る。

——そして、ゼルクの目が、僕の股間に向いた。

浴場の薄い灯りの中で、はっきりと。僕の——男性器の下にある、もうひとつの器官が、ゼルクの視界に入った。

「なんだ——その身体は」

ゼルクの目が見開かれる。だがそこにあったのは嫌悪じゃなかった。驚愕と——言葉にならない何か。瞳孔が広がり、拳が震え、全身の筋肉が硬直していた。

本能の反応。僕のフェロモンに晒された α の身体が——この世界に一人しかいない α の身体が、初めて共鳴した。

「……隠すな。見せろ」

命令だった。騎士団長の命令。

僕のサラリーマン根性が、上司の言葉に反射的に身体を硬直させる。

ゼルクは僕の身体を見た。長い時間。湯の縁に座らされ、脚を開かされ、自分でも見たことのないその場所を、至近距離で凝視された。

「お前——自分の身体が何なのか、分かっているのか」

「わ、分かりません……っ。転移してから、こうなって……っ」

声が震えた。泣きそうだった。三ヶ月間、誰にも言えなかった秘密が——最悪の形で暴かれた。

ゼルクが立ち上がる。僕に手を差し出す。

「来い。俺の部屋に来い」

「え……っ」

「お前の身体の状態は危うい。この匂いが外に漏れたら、砦の男ども全員がお前に群がる。今夜は俺が管理する」

欲情のない声だった——少なくとも、そう聞こえた。指揮官の判断。危険を排除する合理性。

僕は、従った。



騎士団長の私室は質素だった。石壁、木の机、狭い寝台。戦場の男の部屋。

ゼルクは僕を寝台に座らせた。自分は椅子に座り、距離を取る。

沈黙が落ちた。

「転移してから三ヶ月——一度もその身体を確認していないのか」

「……怖くて。見たくなくて」

「お前がどう思おうと、お前の身体はお前のものだ。知らないままでは守れない」

新兵教育と同じロジック。自分の剣を知らない奴に、剣は使えない。

僕は——初めて、誰かにこの身体のことを話した。

「転移した朝、気づいたんです。ここに——あるはずのないものがあるって。最初は夢だと思いました。でも目が覚めても消えなかった。三ヶ月間……ずっと見ないふりをしてました」

声が詰まる。涙が出てきた。

「前の世界でもそうだった。嫌なことから、ずっと目を逸らしてきた。上司に殴られても。将来が見えなくても。一人が寂しくても。全部、見ないふりをして——ここに来て、同じことしてた」

ゼルクは黙って聞いていた。その沈黙が、不思議と怖くなかった。

「……今夜、俺がお前に教える」

ゼルクが立ち上がった。椅子を離れ、僕の前に膝をつく。

「お前の身体が何なのか。何ができるのか。何が危険なのか。一つずつ」

「……なんで、あなたが」

ゼルクが少し黙った。

「お前の匂いが——俺の中の何かを起こした。名前のない衝動だ。だが俺は衝動に支配されるのは好まない。理解して、制御する。それが俺のやり方だ」

灰色の瞳が僕を真っ直ぐ見ていた。制御。理解。この人は——自分の身体にも、何か起きていることを自覚している。

「お前もそうしろ。お前の身体を——お前自身で理解しろ。俺が手伝う」

僕は、頷いた。

この人なら。

訓練場で見た、丁寧に教える姿。怒鳴らない。殴らない。身体の理屈で伝える人。

——この人になら、見せてもいい。

そう思った瞬間、下腹部の熱がまた膨らんだ。



——時系列が追いつく。ゼルクの膝の上。石壁の騎士団長室。蝋燭の灯り。